

令和元年度第30期川崎市青少年問題協議会
第1回起草専門委員会 会議録

○日 時 令和元年5月17日（金）15時00分～16時45分

○場 所 第3庁舎 18階 第1会議室

○出席者

（1）委員 5名

岡田委員（オブザーバー）、芳川委員、新井委員、藤田委員、大草委員

（2）傍聴者

なし

（3）事務局

市川室長、箱島担当課長、戸田担当係長、谷口職員

○配布資料

資料1 第30期川崎市青少年問題協議会 起草専門委員会のスケジュール（案）

資料2-1 第2回全体会における意見まとめ

資料2-2 第30期協議テーマ（案）について

参考資料1 第29期意見具申書 概要

参考資料2 第2回全体会会議録（案）

参考資料3 過去の施設先について

1 開会

- ・事務局紹介
- ・配布資料確認
- ・会議公開についての説明
- ・会議成立についての説明

2 会長挨拶

- ・岡田委員（青少年問題協議会会長）から挨拶

3 議事

(1) 正副委員長の選出について

事務局：本日は第1回目の起草専門委員会なので、議事の中にも正副委員長選出がござい
ますが、事務局から御提案がござい

ます。委員長、副委員長の選出にあたって、起草専門委員会に至る昨年からの協議題・
調査専門委員会での議論の継続性や、第29期で意見具申案の取りまとめいただいた
実績等を考えますと、引き続き芳川委員に委員長に御就任いただくことを事務
局としては御提案させていただきたいのですが、皆さんいかがでしょうか。

(異議なし)

事務局：では、皆さん御承認いただいたということで、芳川委員に委員長をお願いしたい
と思います。芳川委員長には就任の御挨拶をいただいた上で、これからの議事進
行をお願いできればと思います。芳川先生、お願いします。

芳川委員長：ありがとうございます。起草専門委員会になりますので、前回までの色々な
ディスカッションを踏まえた形で、いよいよ文書として提案を具申していく
という形になると思います。その際は委員の皆様の方と会長の力をお借りす
ると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

次に、副委員長の選出につきまして、私の感覚としては、全員が副委員長と
いう感じなのですが、メンバーの中で香山委員は前回も副委員長として色々
なことを考えていただきましたので、私としましては、香山委員を副委員長
として推薦したいと思うのですが、いかがでしょうか。

(異議なし)

芳川委員長：ありがとうございます。では、今日は香山委員は御欠席ですので、事務局の

方から連絡をとっていただけたらと思います。お願いします。

事務局：わかりました。

(2) 今後の起草専門委員会の進め方について

芳川委員長：議事の2番、今後の起草専門委員会の進め方についてです。資料1、資料2、そして参考資料1、2、3とございますので、内容について事務局から説明をお願いします。

(事務局より、資料1～2、参考資料1～3について説明)

芳川委員長：ありがとうございます。では、改めて資料1のスケジュール案のところを見ていただければと思います。流れとして、昨年度の29期に沿ったという形ですけれども、今年は長期連休があったりして、スケジュール的に若干遅くなっているところがあると思います。今日5月17日に集まってきていただきまして、第2回、第3回を令和元年の10月頃までに、副題もできたら少し固めて全体会に臨んだ方がいいのではないかと考えましたので、そういう意味では、そこまでに骨子を固めていただいて、副題のおよその方向性も出した上でそれを第3回全体会に出して、全体の委員の皆様から意見をいただいて、その後、お正月をまたぐ形で具申書(案)を書いて、最終的に来年の5月頃に具体的に残務処理をしていただくという感じで、今、第2回全体会の中では全体的なテーマとして、まだまだ範囲が広いので、この起草専門委員会の中で少し時間をとりまして、そのように進めていきたいと思うのですが、イメージとしていかがでしょうか。

(異議なし)

芳川委員長：大丈夫ですかね。では、これを念頭に入れながら進めていきたいと思います。具体的な案の構成とかは次回考えればいいのかと思うのですが、そうしますと、この資料2-1、2-2を考えていく感じになるかと思います。資料2-2の1ページ目の下の方ですが、【第30期協議テーマ(案)】として、前回承認していただきました「現代を生きる青少年の主体的な社会参加を考える」というものですが、委員の皆さんから色々な言葉をいただきましたけれども、私の中で印象に残っているものとして、例えば、「現代を生きる」という「現代」をどのように私たちが考えたらいいのか。そこには、例えば持続性であったり、継続性であったり、あるいは多様性であったりという「現代」の部分の含みをさらに具体的に考えていくという言葉がありました。それが1つと、あと「主体的な社会参加」ということですから、何かを用意して、そこに青少年に参加していただくということではなくて、今までの3期

を踏まえた上で、さらに青少年自身がこの居場所をつくるのか、あるいは自身が欲しいものを得ていくのか、そういう意味での主体性が、もう1つのキーワードとして、このテーマの中にはあるのではないかと考えます。そうすると、この「現代を生きる青少年の主体的な社会参加」を、今までの仕組みや促し方とか多世代を含めながら、さらに展開して、できれば昨年度以上に具体的な具申ができるようなものを、皆様と一緒につくれたらいいなと思いますので、その部分を、今日残った時間の中で、早速一緒に進め方を考えていきたいと思います。

その中で、川崎、あるいはそれ以外の場所を含めての視察先として、そのアイデア、あるいはここを見ておいたらどうかという御意見があれば、ありがたいなと思います。

まず、前回、全体会に出られて、今までの流れの中でお感じになっていることとか、何かそこから自由にフリートーキングをしていきたいと思います。

新井委員：「青少年の主体的な社会参加」という部分を、青少年はどう考えるんですかね。社会参加をしたいと思っているのでしょうか。それとも、本当は別に何かやりたいことがあるんだけど、大人が勝手に社会参加をさせようと思っているのか。青少年は今どんな考え方を持っているのかなというのを知りたいところですね。

芳川委員長：わかります。実はこのテーマをいただいて考えていたのは、今、新井委員がおっしゃっていたように、本当に参加したいんだろうか、あるいはどのような形だったら社会参加するのか、したくなるのか、青少年の声を知りたいなという感じは確かにありますね。どうですか、藤田委員は、大学生たちとも多分色々おやりになっているかと思うんですけども、いかがでしょうか。

藤田委員：そもそも社会に関わるみたいなのは全く興味が無いという子も、かなり多くいるんじゃないかという気がしますね。そういったところに関わる子は、他のところでも色々関わっている子どもなので、自分の周りのことで精いっぱいという感じがしないこともないです。高校生ぐらいになると本当に忙しくて、部活だとか受験だとかで、それどころじゃないような感じがしますね。

事務局：新井委員とか藤田先生にお聞きしたいんですけども、関わりたくないという子と関わりたい子の特徴のようなものはありますか。

新井委員：募集して子ども会でそういう活動をしたいという人は、そもそもそういう認識があるから、割とすんなり入ってくるんですね。余り考えていない子どもをどうやって引き込んでいくかという、そこがまさに一番大変なところです。長年やって、ずっとそういう青少年に関わっている大人たちは、その辺のノウハウを、こういうことをぱっと言ったら乗ってくるんじゃないかというきっかけをつくるの

が非常に上手いというのを感じるんですね。そういう意味では、何か仕掛けをつくってあげれば、絶対とは言わないけれども、ある程度の子どもたち、青少年は興味を示すのかなという感じはします。

事務局：藤田委員の話で、全く興味がない子は結構多くいるのかもしれないとのことでしたが、その子たちに特徴みたいなものはあるのですか。

藤田委員：大学内で色々なイベントをするとか、社会のことを考えようということをやっても、圧倒的多数の子たちは、ポスターを見ても素通りして、すっと帰っちゃう。ほとんどそうなので、当事者意識というか、自分に関係あるとすらそもそも思えないというか、自分とのつながりがよくわからないということが、すごく多いですね。例えば去年やった授業を15回やって、10回ぐらいでやっとなら、今まで考えていたのはちょっと違ったかもとか、そういう子たちが、そもそもそういう知識も全然ないし、丁寧に、丁寧にやって理解してくると、「あれ、もしかしたら私にも関係あるかな」というのが段々わかってくるという感じなので、なかなか難しい。そういうマジョリティーの子たちをたきつけるというのは、かなり難しい感じが僕はしています。

岡田委員：オリンピックでボランティアを募集などしていると思うんですけども、川崎では何かやっているんですか。

事務局：川崎は、オリンピック関連でいうと、川崎と横浜と一緒にイギリスチームのキャンプ地になっています。宿泊はおそらく横浜なんですけど、練習場を等々力陸上競技場を中心に使っているということで、ボランティアの募集やそうした関連のお話はあるんですけども、「ここです」みたいな話はないです。

東京都もボランティアの話が1回出てから、その後、報道等でもあまり流れないので、どんな感じになっているのかは、もう少し聞いてみないとわかりませんが、ボランティアをやりたい子はたくさんいるという話はお聞きしています。

それは、以前の協議題専門委員会でも高村先生が、色々なことをやりたいという思いを持っている中学生は多いですよ、実際にやりに行っている中学生もいるんだよみたいな話はされていたので、本人たちは全く何もやりたくないということもないのかなというのは、現場の校長として実際にそれを感じていたということが、私も印象に残っています。

藤田委員：楽しそうなイベントとかだったら、ちょっと参加しようかなという風にはきっとなると思うんですけどね。

事務局：イベントとか活動内容がすごくはっきりしているのは非常に参加しやすくて、その活動が単純でも、例えばお祭りのときに行って中学生が自分たちでペットボトルを仕分けして潰したり、そういうのを子どもたちは結構やりたがるんですね。

だけど、自分たちで何か創造してやるとなると、それができない子どもも多いのかな。子どもだけの問題なのか、子どもに起こっていることは、もしかしたら高齢者にも起こっているのかもしれない。あまり関わらないでほしいと思っている子ども、何となく感覚としては、1割ぐらいいいるのかなとも思うんです。例えば、京町中なんか地域でやっている神輿とかにも、中学生のほぼ全員が参加して、みんなで神輿を担いだりとか、何もやりたがらないというわけではないと思うんだけど、何か具体的なものが見えないと、なかなか参加しづらいのかと。

藤田委員：社会参加といったときの、こちら側が社会参加をどんなふうに見ているのかみたいなの、そこも我々は問い直したほうがいいような気がしますね。

新井委員：1ついいですか。部活動と同じような感じで「帰宅部」というのがあるということ。そういう部活に入らないで家に帰っちゃう子というのは、どのぐらいいるんですか。

事務局：川崎の場合は90%以上の中学生が、部活動にほぼ入っているんですね。だけど、実は学習指導要領の中では、もう20年前から部活動は自由参加ということになっているので、入っても入らなくてもいいんだけど、川崎の場合は非常に盛んなので多くの子どもたちが入っているんだけど、ある地方に行くと、半分も入っていないという地域もあったりして、本当にまちまちなんですね。放課後に部活動のない中学生とかが自由になってしまった場合、受け皿があるのかなということは課題ではあります。

事務局：社会参加のいい意味というのは、やる中高生と我々のような大人が考えるところに少し考え方の違いがあるというイメージですか。

藤田委員：ギャップがあるんじゃないかなという気はするんですね。やっぱり大人たちがいると、大人たちの都合のいい社会参加を子どもたちにさせようという風になりがちだし、そういうのほど参加したくないということになっちゃうんだろうなと思うんですけど、かといって何も無いところから子どもたちが、ということでももちろんなくて、どんな風に歩み寄っていくとうまいものが生まれるんだろうというのは、課題だろうなという気がします。

芳川委員長：東海大学の場合は、実はサークル活動がものすごく盛んなところなんですね。チャレンジセンターというところがあって、部活動は何百とある感じになっていて、既に指定されている部分もあれば、ボランティアをベースにして自分たちで作って、それを大学に申告するという部分もあります。大学に申告すると、許可をもらえれば補助金がもらえます。面白いのは、自分たちで作って、ちゃんとした活動を出してやっているサークルも結構あるんですね。そこは、例えば病院の手伝いに行ったりとか、図書館の読み聞かせに行ったりというふうな

部分が意外と数多く出てきているんだなというのは、すごく面白い仕組みだなと思っていて。全く自主的ですからね。大学は何の関連もなく、ちゃんとやっていけば少しサポートしますよという感じなので。

もちろんあれだけの大学生の中で、ほんの一握りだと思うんですけども、そういう意味では、やりたいとか、主体性とかは、何があれば生まれてくるのか。今、藤田委員がおっしゃったように、大人が仕組んだものだと、きつとなかなか気づいてくれないとか、あるいは参加しないんですけど、自分たちの何かがセンサーに当たると、やってみるみたいな感じにきつとなると思うので、そのボタンはどこにあるのか、そこは考えてみたくなるなという気がしますね。

新井委員：そういう例えば読み聞かせとか病院の手伝いに、彼、彼女たちは、どこから何を見て、どういう情報によって、そういうのを見たり聞いたりしたんでしょうか。そのときに、こういうのはいいなと感じるから発信すると思うんですけど、我々だとそこまで広がらない。ツールは何なんですかね。

芳川委員長：募集は1人で、メンバーが20人を超えると認められるんです。だから、その人が、周りに、「やらない？ やらない？」みたいな感じで声をかけるんですよ。大学は全くキャッチしないし、宣伝もさせませんので、本当に知っている人に声をかけて、といった感じでできているらしいんですよ。

事務局：誰かキーパーソンみたいな、きっかけとなる、「私やりたい」みたいな、そんな子が口コミで、やりたい人を集めるのでしょうか。

芳川委員長：はい。そういう子がやりたい人を募集してという感じなんですね。そういう意味では、仕組みは、ものすごくシンプルですね。

藤田委員：川崎市にあるかどうかわかりませんが、今のお話でちょっと思うのは、やりたいけど何をやっていいかわからないのではないかなと思うんです。そうすると、例えば今言ったボランティアセンターとか、何とかセンターみたいなのが、そういう情報を持っていて、今こういったところで、こういうふうなことを募集していますとか、この保育園で読み聞かせのボランティアを募集していますとかというような色々なものがあって、それを見て、「だったら、これやってみよう」みたいになるような仕組みがあるといいのかなと思ったんですけど、どうなんですか。川崎市にそういうのはないのでしょうか。

事務局：1つは「かわさき市民活動センター」です。かわさき市民活動センターは、前身はボランティアセンターという名前になっていて、色々な地域の団体が、こういう風なものを募集しているということで、中原市民館にありますけれども、団体が会議場所に困ったりするので、会議ができる場所だとか、こんなものを募集しているとか、そういう掲示板があったりとか、そうした活動は行っています。

ただ、すごくうまく機能しているのかというと、知っている人と知らない人というというのが現実です。

藤田委員：きっとそういうのは情報が到達しないんですよね。

事務局：発信とか、やっていることを知っている方はいるんですけど、それをとりに行くときのきっかけとか動機とか、そういうところは、確かに先ほど皆さんのお話の中にあっただように、本人が何かを欲していれば、探そうと思えば、今はそういうSNSなりツールはたくさんありますので、そこからどんどんキャッチできる社会になっている。あるけれども、それを取りに行くということへの壁は少しあるかなという感じがするんですよね。私どもでもまだまだ知らない市の制度はたくさんあって、それをキャッチする方と、本当に必要なときにマッチングしていくのは非常に難しい部分があるというのは、実感として私も思っています。

藤田委員：前の具申書でも繰り返し、情報をどう届けるかという話は何回も出ていますが、恐らく情報を発信する側も、中学生、高校生にやってもらおうという意識で募集はしていなくて、中学生、高校生にやってもらおうとしたら、どんなものがあるだろうみたいに考えて、それぞれ募集をしてもらうという働きかけと、そして、中学生、高校生に、そういうのがあるよというのを伝えるような働きかけ、その仕組みみたいなものがあれば、やりたい子はきっとやるようになるだろうとは思いますがね。

事務局：参考資料1にありますように、前期、藤田先生から、特に第5章で「情報の伝達」「内容の工夫」「参加可能性の確保」という課題でまとめていただいていますね。

藤田委員：そういう仕組みが、それほどお金をかけないでできないことはないと思うんですけど、そういう双方のニーズをつなげるような仕組みがあるといいんですけどね。

事務局：1つは、すごく今タイムリーなのは、御存じのように、この4月から部活動のやり過ぎに関して、土日はどちらか必ず休む、平日の中で1日は必ず休みなさいというのをやることになっているので、今、逆に子どもたちが地域とか、そういう子どもの活動に戻ってくるとしたら、ここが一番のチャンスかなという、今の議題の1つかなと思います。

高校入試では全員面接しているので、今までも川崎の場合、ほぼみんな部活動に入っていることを前提に、「中学校で何の部活をやっていましたか？」みたいな、そういう面接をしちゃうんだけど、そうじゃなくて、高校も子どもたちを見るときに、「地域でどんな活動をしていますかとか？」「何かボランティアをやったことがありますか？」とか、そういうことを面接の中で聞いていってあげるのも、自分からそういう風に言える子もいるかもしれないけれども、子どもたちが自信

を持って、自分は子ども会に入っていましたとか、ボーイスカウトをやっていたとか、そういうふうなことをもっと言えるような質問を高校もしてあげた方がいいんじゃないのかなと思うんですね。

藤田委員：私は以前、上越という地域の大学の教員をやっていたので、そのときに文京区とかでやっているものを参考に提案したんですけど、子どもたちに「学びのポートフォリオ」みたいなものを持たせて、それは学校ではなくて全ての「学びのポートフォリオ」みたいなものを蓄積していくような、川崎市が、川崎にはこんな学びのチャンスがありますよというのを小冊子で毎年配るようにして、ここに行ってこんなことをやると、こんなことができるみたいなのを、それぞれの団体から出してもらったようなものを配る。その中から子どもたちが行きたいところややりたいことを選んで、そこで何かやると、自分のポートフォリオの中に、その実績を蓄積していける。そういうのが、例えば今おっしゃったみたいに高校受験のときに、貯まった「学びのポートフォリオ」はこんなのですと見せられたり、あるいは中学校の中で1学期が終わったときに、こんなことをやりましたということを誰かが発表するとか、そういうような川崎市の子どもたちは色々なところで色々な学びを蓄積していく仕組みができるといいだろうと思います。そういった取組の中に、もちろんボランティアとかもあるでしょうし、色々な子ども会の活動とかもあって、自分の学びとして、子ども会のリーダーになれば、またリーダーとしての参加みたいなところで新しい「学びのポートフォリオ」が加わる。そういう子どもたちが色々なところで社会参加したとか、勉強したとか、体験したものを、市としてちゃんとそれを認めていくような仕組みがあれば、動機づけが出るかなという気はするんですね。

新井委員：札幌市と静岡県で、子ども会が教育委員会から委託を受けて、中学生に遊び、ゲームの仕方とかを教えることによって1つの単位をあげますよというのをやっているところがあります。

藤田委員：そういう意味では、単位をいっぱい貯めるんだ。30単位とりました、もう卒業ですみたいな。やったことが何か形になって、すごく面白いみたいな、ゲームでもあるじゃないですか、1つ1つ倒して行って、最後はここのステージに至るみたいな、例えば大学受験などで、こういうことをやりましたみたいなことが言えればいいと思います。受験でつるというのもどうかという気もしないでもないですけど。

芳川委員長：今、藤田委員がおっしゃったように、体験をさせると同時に、体験を蓄積させて、蓄積していることが自分で見えるということですよ。

藤田委員：そうです。見える化する。

芳川委員長：見える化していくこと、それがきっとポイントを貯めるような形で、すごくわかりやすいんじゃないか。これが、例えば市の中で、どうそれを認めるか。認める手法があれば、何ポイントもらったら川崎市から賞状をもらえるとか、何かそこは仕組みがあると、主体性みたいなものがちょっと出てくる可能性はありますね。

事務局：高校入試の自己PR書とかに、地域でこういうことをやってきたということをもっと自信を持って書けるようなシステムにしてあげれば、ちょっと打算的かもしれないけど、やってちょっと得したなみたいなどころがあってもいいのかなとは思います。

大草委員：でも、今の子どもって得したいと思っていないでしょう。それから、市長から色々なものも、それを欲しがるといいけれど、そういうものを欲しがらないわけですね。だから、いわゆる動機づけそのものが難しい。子どもの側に、こういうものをやってみよう、こういう風にやってみようかなというような、“適応志向性”といわれる態度のことを言っているんですけど、それが今の子はほとんど無いです。僕は職業柄、そういう土壌の中から問題を起こしてきている子ばかり見ているから、そういうようなものが、ある種特異な形で出てくるのが問題児ということだと思います。その子たちを見ると、人間の社会の中で、うまく適応していこうなんて考えていません。関わりたくないという気持ちもないんです。積極的な拒否するということでもないんですね。そういう子どもが、例えばいじめ問題でも、人間関係の中では、波風立てず平和にやるのがよいことなんだよということは考えないんですね。そういうことが人間としてとても素晴らしいことなんだということを考えないから、幾ら餌を投げても食いついてこないというのが、今の教育の隘路というか、特に問題児なんかは、そういうところが学校の先生が一番苦渋する。

さらには、現代というのは、青少年にとって現代をどう考えるのかとか、よりよくなっていこうでも、向上しようでも、今まで我々が言ってきた、よりよくなりたいという自己実現なんて言葉もありますけど、そういうのを一切考えなくても生きていける社会が現代だと私は思っているんですね。昔の子どもは、ハングリー精神なんて言われているときも、それから「エコノミックアニマル」の、1950年から80年ぐらいまでの社会でも、こういう風になっていこう、こういうふうにするんだというように、人間が志向性を持っていた。それが全くないような状態でもやっていけるのが現代。特に子どもの成長や教育という視点から考えたときの現代の問題というんですかね。それは教育の学校現場では如実に出てきているように思うんですね。

例えば嫌な先生の言うことでも、従うことに価値があるんだぞとか、こういうことが生徒にとって大事なことだろうといったときに、ほとんどの子は、「えっ、ほんとですか」と言うんですよ。「おまえ、こんなこと考えないの」と聞

くと、「考えなきゃいけないんですか」みたいな、高校生でも、このレベルなんです。そうすると、やっぱりその中に、よりよく生きていこうとか、社会の中で平和にやっっていこうとか、こういうことに価値があるんだよねとかいう、価値の崩壊なんていうことも言われていますけど、そういうような考え方を子どもたちはほとんどしなくなっているから見なければいけなくて、そこに火をつけようということなわけですよ。

新井委員：ちょっと乱暴な意見になるのかもしれないんですけども、いつの時代でも、約1割強ぐらいは何をやってもできるし、立派な人間になっていくんですよ。今言われたように、1割強ぐらいは、幾らこっちがやったって全然できない、どうしようもない。我々はどこに焦点を当ててやりましょうかというときに、まずそれを議論しなければいけないと思うんですけど、個人的には、僕はその両極端はそれぞれの専門家にお任せするしかないので、我々は残りの75%か7割かわかりませんが、その辺のところ、どっちつかずのような中でちょっと迷っている人間が1人でも2人でも、こういうことによって目覚めていけば、それはそれで、全員がこうなるということは考えられないので、その辺に絞れたらいいかなという気はします。じゃあできないやつを放っておくのかとなっちゃうと、実際問題、膨大なエネルギーを使ってもなかなかできるものじゃないですね。そんな感じは受けます。大草委員のおっしゃっていることは本当によくわかる。どこかで切っちゃうというのも言い方が悪いんですけども、そんな気がしました。乱暴な意見で申しわけないのですが。

大草委員：ただ、どのぐらいの割合いるかというようなことは別としても、総じて、例えば勤勉性の大事さとか、色々なことがあっても自分で色々と検討して考えた、自分の決定に沿った行動を、周りには作用せず自分だけはやっっていこうという、いわゆる自主性とか主体性の確立というか、自我の確立みたいな、そういう動きが相対的に弱いのが現代っ子だと思っているんですね。その可能性ということであれば、やっぱり私は、どの子もそういうことはあまり関心がなくて、そんな子は、どちらにしる動機づけするというのは難しい対象で、さらには、今の子どもは、社会参加の重要性なんていうのは気づいている子もあまりいないし、そこが自分の人格形成にとっても重要なポイントなんだみたいなことを考えている子はほとんどいないと思いますし、その子どもたちが他のことは考えているわけですね。要するに、部活の中でうまくやっっていこうということを考えている子もいれば、試験の点数はいい点を取ろうとか、トップになろうとかいうような、色々なことを考えている子はたくさんいるんだけど、社会参加とか、特に人間性、どんな人間がすばらしいのかとか、どういような適応をしていくことが自分にとってはいいことなのかとかいう、そんなことはあまり考えていない。その難しさがあると思います。

新井委員：私も子どものときは全然考えなかったです。せいぜい良い点数を取りたいなぐ

らいはあったかもしれないけど。

大草委員：だけど、社会全体としては、やっぱりいい生活をしたとか、学歴をちゃんと確保していい会社に行きたいとか、できたらブルーカラーよりはホワイトカラーだとか、いわゆる戦後の時代には、そういうことを考えていらっしやらなかったとおっしゃいますけど、でも、暗に社会全体の動向から、そんな流れの中に沿って私たちはやってきたんじゃないですかね。

新井委員：根底には、僕らみたいにまだハングリーな、ともかく米の御飯を食べない、麦が半分ぐらいの御飯を食べて育ちましたから、やっぱり真っ白な御飯を食べたいとか、毎日卵焼きを食べたいとか、そういうのはありました。それは今は普通の状態だからね。

大草委員：今の子どもはそういうことを考えないでしょう。だから、言ってみれば、我々の世代は全共闘世代ですけど、少しでも名の通った大学へ行こうというのが暗にありましたから。そういう意味では、今の子どもは、実際調査をしてみても、どこでもいいですみたいな子が多くて、あまりそういうのは無いですね。おっしゃるように、ごく一部、パーセンテージでいうと大体1.5割ぐらいの子は、やっぱり上昇志向とか、名の通ったところに行くんだとか、何とか博士の後を追いかけるんだみたいなことを持っている子も確かにいるんですけど、そういうことをあまり考えなくてもやっていけるような時代になって、そういうことは余り考えていない子が増えたので、今の青少年問題が大きくなっているんじゃないかという気もするんですね。

そうした子どもに対して動機づけを行うというわけだから、さっきの情報の伝達の行き届きという点では、私はこれにはLINEの活用は必須じゃないかと思います。あれは自分が意図していなくても情報が入ってきちゃうというものなので、そういう機能をもっと利用して動機づけのための情報提供するようなことを考えるのはいいんじゃないかな。要するに、子どもたちが自発的に動くのを待っているのではなくて、こちらから無理やりにでも情報を行き届かせてしまう。そこから先、子どもたちがそれに参加するかどうかというのは、また子どもたちの自由に任されるわけです。

藤田委員：社会参加のイメージというようなことを先ほどお話ししたと思うんですけど、僕としては、社会参加というのは、かなり広く考えていて、そんなの社会参加というのぐらいのレベルからもう社会参加でいいんじゃないかという気がしていて、社会の他の人のためになるようなことをするみたいなことだけではなく、自分だけではない、他の人たちと一緒に何かをやったみたいなことでもいいような気が僕はしています。なので、そういうような情報を、今、大草先生がおっしゃったような色々なやり方で、直接子どもに届くような方法があったらいいだろうなとは思っています。でも、情報の質は管理しないと、おかしな情報

が行ってしまっただけは困るので、そこは情報はきちんと登録して、認めたやつだけがきちんとそこに載るみたいに、情報の発信側は質の管理はちゃんとしないといけないと思うんですけど、それに登録した中学生、高校生のところには、それが直接届くみたいにしてもいいかなと思います。

あと、前の期のもので書きましたけど、こども文化センターなんかも、そこで社会参加の1つの場として活用できるのではないかという風には今でも思っていて、それは全部のこ文でできるかどうかは、こ文の状況は随分違うのでわからないんですけど、イベントをやりますみたいなことだとか、場合によっては子どもが、こういうイベントをやりたいので人を集めたいんだけどとあって、こ文の人と相談して、それは仲間を募集しようみたいなことをやったりとか、色々な可能性は秘めている場所だと思うんですけど、なので、そういったところも活用しながら、子どもたちに社会参加のためのこんな機会がたくさんみんなの前に開かれているみたいなことが伝わっていくようにするといいんだろうと思います。そして、それに参加したことが、先ほど言ったみたいに蓄積されて、格好いい名前で、川崎ポイントじゃないですけど、ポイントを貯めると何かに引き換えできるみたいな、それは言い過ぎかもしれませんが、そういったものがその子の利益になっていくようなことが連動していくと、それも高尚なところから、それほどでもない仲間内の何かみたいなのところまで色々あるというのはどうかなと思います。

新井委員：こども文化センターは中学校区に1つあるので、中学校区内なら歩いて行ける。それ以上遠くなったらバスを使ったり電車を使ったりしないといけなくなるから、交通面でも危ない面もあるけど。子ども以外に、これから高齢者も増えますけれども、高齢者には区に1つあるぐらいのものだと遠過ぎちゃって、ほとんどバスで行かなければいけないということになっちゃうと、ほとんどみんな行かなくなっちゃう。そういう面では、こ文はうまく活用すれば良いツールにはなると思います。

芳川委員長：前期、喜多見児童館に子ども食堂を見に行っただけですけども、その仕組みがすごく印象に残っていて、QRコードがあるんですよ。あそこでは、どういうイベントがあるのかリーフレットの中に全部ありますので、そこに照らし合わせると、いつあるかということと、今、藤田委員がおっしゃったように、子どもたち、特に中学生、高校生は、自分たちでこれをやりたいという企画も承認しているので、今の話でいくと、そこでやりたいんだけど、募集していますという風に、その中に乗っかっていくと面白そうみたいな感じで集まることもきっとできるんじゃないかと思いますので、あれは今、川崎で考えるとこ文になるかと思うんですけども、そこが1つの仕掛けとしてはどうかという感じがありますね。

藤田委員：子どもたちがどういう情報かわからないのに集まるというのは、すごく危険で

すけど、こ文とかが仲介していると、ちょっと親も安心ですね。

大草委員：テーマは全然違うかもしれないんですけど、例えばヤフーとかグーグルがあるじゃないですか。あれはどうやって、誰が、どんな風に運営しているんですか。なぜこんなことを聞くかという、あれの川崎版で、こども文化センターにそういうような運営主体があって、ああいう風なものを全部に発信して、しかも、そこでは色々な企画もあれば、募集もあれば、商売のコマーシャルとか色々なアピールが載っているわけですね。ああいったものはどうかと。

藤田委員：前に「KJネット」といったものを提案しましたけどね。そこに行けば色々な情報があって、学校の情報も発信していたりとか、そういうのがあったらいいなとは思いますが。ただ、提案しても、なかなかそういうのは実現しそうもない。

大草委員：ちょっとわかりませんが、大もとの基盤が、このこども文化センターあたりのどこかのところにサーバーがあって、そこで一括管理して、いいもの悪いものを全部そこでセレクトする。

事務局：管理の仕方が難しいかもしれません。特に、セレクトというのは難しいですね。ヤフーとかグーグルも割と緩やかというか、あくまで広告みたいなものもあって、あそこから情報を取っていくのは、取る側の責任もあって、割と緩く載せられる。検索するエンジンなので、情報を管理しているわけではなく、インターネットという社会の中の情報に、どこを検索してひっかけていくかみたいな話なので、運営団体自体が情報をセレクトしているとか、管理してくれているということはないです。

大草委員：でも、そういうものを加味したものをつくり出していくことは可能なわけですよ。

事務局：不可能ではないと思います。ただ、誰がどうやって管理していくのかとか、管理の基準であるとか、そういう整備は必要かもしれないです。

藤田委員：NPOか何かに川崎市が委託して、そのNPOが川崎子どもネットを運用していますみたいな仕組みであれば可能だと思います。

事務局：例えば皆さんの方から意見が出ている部分で、市にも川崎イベントアプリとか川崎子育てアプリがあります。情報を載せて発信していくのも、行政がやっていると、必ず所管課があって、所管課のどこかがやっている事業がここに載っていくわけですね。それは所管課というフィルターを通して行政がやること、もしくは子ども会がやっている事業、ある程度公共性を持った団体がやっている事業をここに載せて配信していく。

大草委員：背景にそういう運営母体があるわけですね。

事務局：誰がセキュリティーの責任を持って載せるのかみたいなのところについては、庁内で結構議論はあって、全てのところを行政が、ここはいいよ、ここは悪いよ、ここはだめだと。特にだめなほうですよ。地域の活動みたいなものとかは、何をもってだめと言えるのか。その辺の難しさは確かにあるかなと思います。

大草委員：運営上の困難さはありますよね。

事務局：ハード的なものは整備はできると思います。問題は、それを誰が、これはよくて、これは悪いという判断がつけられるのか。前も委員会の中で話したのですが、行政は恐らく苦手な分野だと思います。地域の活動で、これがだめだという活動を、行政がはっきり言うというケースはほとんど無いですよ。じゃあ、それをまとめて載せられるものはあるのか。色々試してはいます。例えば地域活動で、お祭りだとか、町会のチラシを、社会福祉協議会が地域情報みたいな形で社協のホームページに載せたりします。そこには、どこどこ町会がやっているものとか載っていたりするんですね。でも、社会福祉協議会も、どちらかというところの加盟団体で、すべての情報をなかなか載せていけないというところは、現実問題としては、もしかしたらあるかもしれないですね。NPOも含めて、これだけ色々な活動をしているところがあって、それに対して、これがよくて、これが悪くてみたいなことというのは、特に載せない方のセキュリティーというか、恐らく心配だから載せてはいけないみたいな話のところを発信していく難しさはあるかもしれないですね。

事務局：学校には全部ホームページがある。総合教育センターのものと2種類あるんだけど、総合教育センターの情報は視聴覚センターで全部その内容を吟味して、それに1回オーケーを出して、もちろんいじられないようにして載せているということで、かなりセキュリティーは高くしてありますね。だから、逆に使いづらいということもあって、みんな更新するのが、もういいかみたいになっちゃう。

藤田委員：イベント情報等はタイムリーさが必要になってきますからね。

芳川委員長：色々な話が出ているところだと思うんですけども、まだ今日は方向性ということですから。ただ、できたら視察の場所も考えていきたいなと思います。確かに箱をつくるのは決して難しくないというところも、幾つかの区で、あるいはNPOでつくっているのは見たりしているし、要は、その情報を持ち寄ることができるのであればいいかなと思います。運営は確かに難しいかもしれませんが、実は最初からそのラインの取り決めがあれば、個々のケースごとに決めるものではないですし、実際に箱ができたときに、そこ

で運営の部分が上手に設定できれば、すごく危険なサイトなどは除けることではないかなという感じはしますので、そういう意味では、まだ考える余地はあるのかなと思います。あと、居場所という点では、LINEの中も、今はSNSも居場所になっていると考えていきますと、その場になくても、1つの居場所をつくるということも可能かなと。だからこそ、あれだけツイートを発信したりしているんじゃないかなと思いますから。そういう意味では、居場所は、ただ単に現実的な居場所ではなくて、仮想世界の中での居場所というのも、居場所として入れることができるかなとか、色々なことを皆さんの言葉を通しながら考えているのですが、どうですか。

例えばこの視察の中で、こういうネットを使つての団体、箱物とか、あるいは運営をやっているNPO、もしくは市があれば一番いいかと思うんですけども、そういう具体的にやっているところの話の聞けたりとか、見に行けたりというのはないですかね。

新井委員：武蔵小杉の高層マンションのイベントをやるのをNPOでやっていると言ったよね。まちづくり局が発信してつくらせたりとか。

事務局：「エリアマネジメント自治会」というのをやっていて、そこはマンションが幾つにも分かれていますので、NPOで町内会・自治会ではなくてエリアでやって、事務室を用意して、そこで町内会・自治会みたいな形ではなくて、幾つかのマンションを合わせてNPOとしてエリアマネジメントをやる。そういう仕組みのものはあります。

岡田委員：それは財政はどうなっているの。資金はどうやって集めているんですか。

事務局：基本的には持ち寄っていると思います。あそこは住宅が集まっていて、非常に近接していますので、それを再開発のときから、まちづくり局がわかっているの、それをエリアとして、NPOで緩やかにやっていこうよというのがあります。逆に難しさは、新しいところがそこに入っていくとか、これからそこが大きくなっていくとか、そういうのは、もしかすると難しいのかもしれないと思います。

新井委員：新しく入ってくるのはないと思います。その中だけで。

藤田委員：完結しちゃうんだ。

事務局：そうすると、あそこは分譲の方もいれば賃貸の方もいらっしゃるの、私の方はマンションとっていますが、分譲型というのは買いますので、動くと言っても、そんなに大きく動くものはないんですけども、賃貸の方は、ある一定の期間で動いていくので、やり方が難しいというのはあるかもしれません。

新井委員：地域が継続的に存続していくというのは、よく団地があるじゃないですか。分譲なら分譲、賃貸なら賃貸、それは多分こうなっちゃいますね。ある時期、子どもが増えてなくなっちゃう。だから、正常な地域じゃないです。やっぱり分譲があったり、マンションがあったり、賃貸があったり、一戸建てがあったり、そういう方向的なものがあって初めて地域が継続的に続いていくのかな。

藤田委員：まちづくりというのは、一様にすると実は最悪なんです。

新井委員：ある一時期いいときがありますけどね。

藤田委員：多様性を保たないと、実はまちづくりというのはだめなんです。だから、そこはちょっとわからないです。

新井委員：でも、そういう機会があるというのはいいかもわからない。

芳川委員長：そうそう。

事務局：ちょっと調べてみます。

藤田委員：あと、豊島区に「豊島子どもWAKUWAKUネットワーク」というのがあって、プレーパークから、子ども食堂から、無料学習支援から、色々なことをやっているんです。そのNPOが前から気になっていて、うちの近くにあるんですけども、どんな風に、どういう人がどういうことをやっているんだろうみたいなことを、ちょっと知りたいなと思っている。今回のものに直接関係あるかどうかはわからないんですけど、何かヒントになるようなところがあったらいいなみたいな感じではあるんですよ。

事務局：豊島区自体は、人口自体も減少傾向にある。東京都の区内でも、地域が変わっていかねばいけないというところで、子育て世代をどうやって入れるかということは考えているのでしょうか。

藤田委員：学校も多くて、その意味では、川崎もちょっと似た側面もあるのではないかなという気持ちでいるんですよ。豊島区は、一時期存続が危ぶまれたんですけど、最近はむしろ人気が高まっていて、人口が増えてきているんじゃないかという気がするんですね。その意味でも、豊島区と川崎市って、似ている気はちょっとしているんですね。

芳川委員長：よろしいですか。時間がオーバーしてしまって申しわけありません。今日のところはこれぐらいで、今2か所ほど見学したいというところと、もし何かあれば、事務局の方にお問い合わせして情報提供していただければありがたいかな

と思いますので、よろしく申し上げます。

事務局：はい。

(3) その他

事務局：次回の第2回起草専門委員会につきましては、先ほどのスケジュール案で御確認している7月頃の開催の予定をしております。今日は欠席の委員もいますので、視察先だとか御意見は改めて調査票を皆さんにまたお配りをして、それを集めて、また7月に開催をさせていただきます。追って日程調整をさせていただくようにしますので、よろしく願いいたします。以上です。

芳川委員長：では、本日の議題はこれで終了しましたので、議事進行を事務局に戻します。どうも委員の皆さん、ありがとうございました。

事務局：芳川委員長、ありがとうございました。実はこの会議の前に子どもの権利委員会が市長に答申をしていて、居場所づくりのこととか、ネットのこととか、ある意味かなり共通している部分がありました。やはり子どものことに関しての思いは皆さん非常に熱いものがあって、子どもが川崎をこの後つくっていく、その子たちにどれだけ大人がエネルギーを注いでいけるかということが大切なのかなということが非常に強く思いました。そういう意味で、こういうところで色々な御意見を聞けるということで、自分自身も非常に勉強になっているし、色々な先輩方からの御意見を、また今後も生かしていけるといいなと思っています。本当に充実した会議になったかなと思っています。ありがとうございました。